

# 三重県安芸郡明合方墳について

## ——三重県主要古墳基本調査 3——

### 原始古代史部会

#### 一、調査への過程

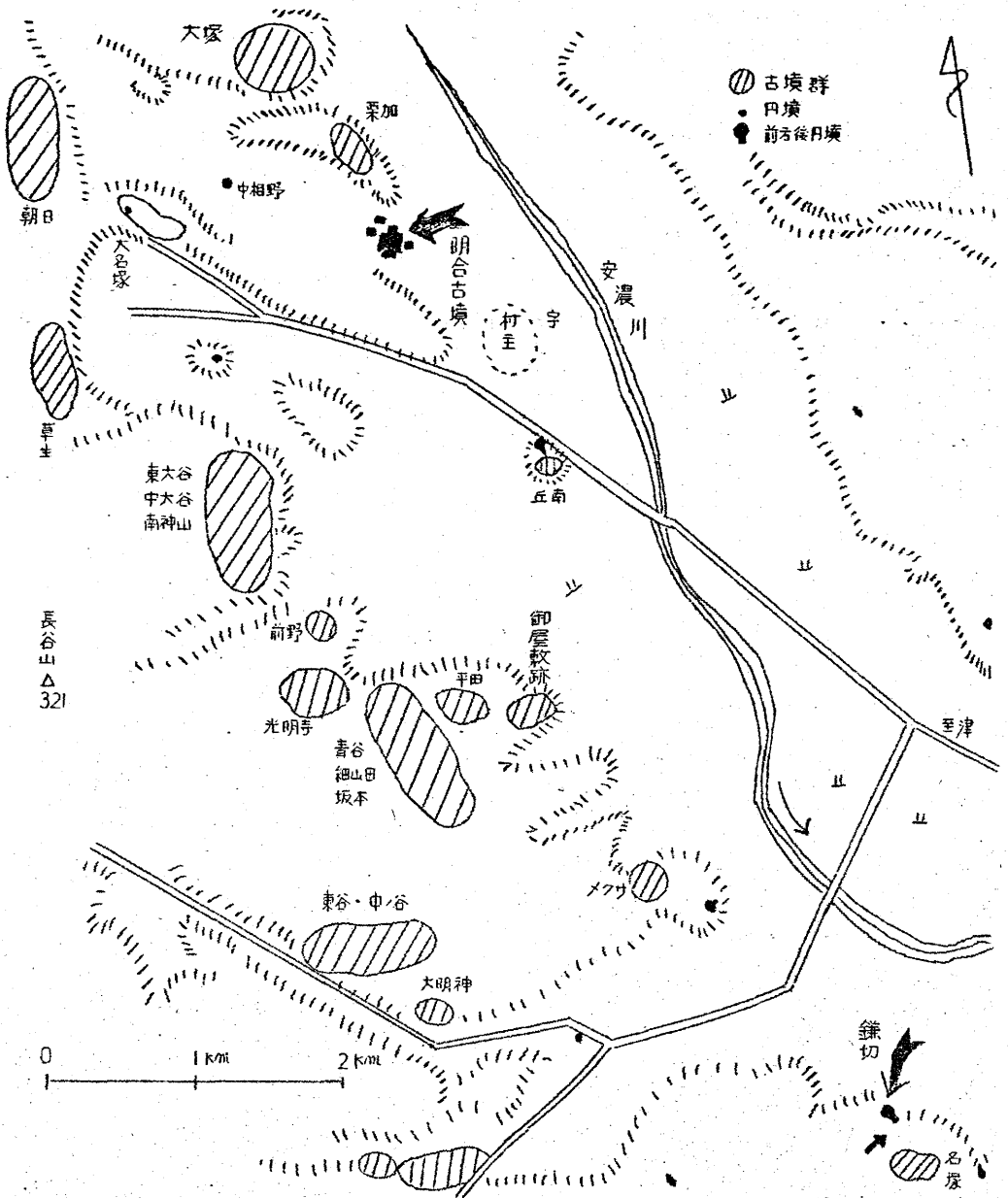
三重県下に於ける数多くの古代遺跡は日に日に破壊の度合を増している。しかもその破壊も機械により徹底的に行われ一瞬にして跡かたすり消し去り行く無惨なものとなつてゐる。かくの如き事態に対して昭和三十六年（一九六一）、県教育委員<sup>註①</sup>会主導の下に、県下各地の遺跡調査が行われ遺跡が帳本<sup>註②</sup>作成された。また県内各地において文化財保護の声も大になつてゐる。しかしこの調査もその時向的制約、或は調査人員などにより詳細な調査が行われていない。こう言つた中で我々が直面する問題はこれの古代遺跡の現状を正確、詳細に把握し、同時にこれに伴う出土遺物の確認と整理の問題であつた。この様なわけで一九六二年一月一志郡嬉野町所在高野前方後古墳を、プロロ「ク」として県下の主要古墳調査を開始し、又一昨年四月には同地所在の西山前方後古墳を測量した。さうに昨年に至つて一月津市西方野田所在の鎌切前方後円墳を測量、同年三月龜山市木の下前方後円墳（八月発掘調査）、十一月には伊勢市外宮裏山所在の高倉山巨石墳の墳丘並びに石室の調査を行つて来たので

ある。

本明合古墳は一昨年四月上旬高野古墳に続いて測量を行つた。又、その後部会内の他の活動の各報告の機会がなくなり、昨年十二月一部再測量を経てここに報告するに至つたのである。本明合古墳に就いては伝説、口碑に聞く所が無く古来より本古墳の東方、宇田端上野の人々が主墳頂上に社殿を設けて愛宕神社を勧請し、祭祀を行つていたが、明治末年廃止されるに至つた。昭和二十四年、津高校地歴部によつてこの地域の古墳の見学が行われ、この古墳のあることが、故鈴木敏樹氏に知らされた。その後同氏の实地調査により本県内未曾有の方形墳と判明したのである<sup>註③</sup>。

クいで山田勘蔵氏等（故村治園次郎氏、竹島基三氏）の昭和二十五年九月の調査が行われ、さうに梅原末治氏、斎藤忠氏等によつて確認された。昭和二十七年十月十一日には、国指定史蹟となつてゐる。又斎藤忠氏は『日本古墳の研究』（吉川弘文館、一九六一）に双方中方墳の名称をつけ、この略測図を載せられてゐる。この様に有名な古墳にもかかわらず詳細な測量が

安濃川中流域古墳分布図

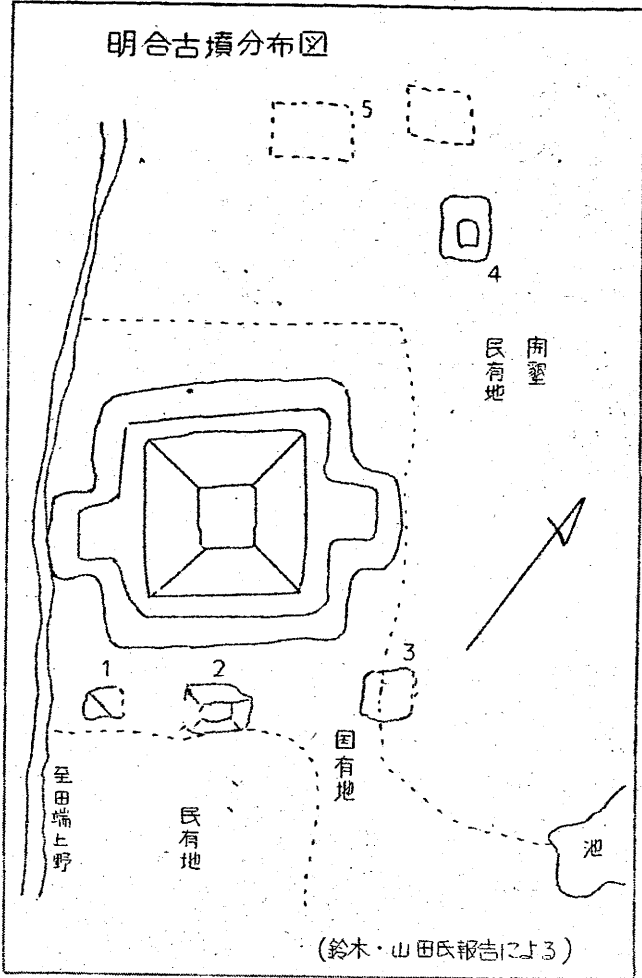


行われてこそ、その正しい全貌は不明のまゝとなつていた。

二、位置及び地形

鈴鹿山地から伊勢湾に注ぐ数多くの河川の内の一に経ヶ峯（海拔八百七十三米）及び錫杖ヶ嶽に水涿を発する安濃川がある。この安濃川の上流近し安芸郡安濃村の西辺には経ヶ峯東麓よりのびる比高二〇米前後の低丘陵の末端はや、広い低位段丘となりこの東端に明合古墳水造つれてゐる。行政的には同郡安濃村田端

明合古墳分布図



三、各古墳の形状

故鈴木敏雄氏によれば陪塚として全五基が、山田勤蔵氏によれば陪塚として全六基が報告されている。しかし現在では両方に遺出しを有する主墳とこの比例に二基と南東側に一基の小型の方墳しか認められぬ。山田氏の報告によれば北側の三基は「宇型」に並び、南側では三基が主墳の長軸と平行して築かれていたようだ。

(1) 主墳

本墳は以前その頂上に愛宕神社が祭られていて、その為「愛宕山」と称される。県下最大の規模を有し、二辺の中央遺出しを有する、略正方形の二級築成の方墳である。各碑忠氏は双方中方墳の名を手え我が国方墳中の特異な形として重要視している。

上野字西観七七六（七七九）に位置している。安濃川流域とその周辺の丘陵地には数多くの遺跡が見られる。しかし下流域の南辺の丘陵地にある津市野田所在鎌切古墳（全長約五。米の前方後円墳、津市指定史蹟）の他は前半期の古墳は未だ発見されていぬ。しかし明合古墳の南約三杆にある長谷山（標高三三二米）の東麓一帯には全四百余基の後半期古墳がある。

又西方の経ヶ峯の東麓一帯にも、数多くの円墳を見ることが出来る。

本墳はその基底面を北東―南西（以下南北と記す）北西―南東（以下東西と記す）にとり、この北西―南東辺即ち本古墳の北東部と南東部に遺出しを有する。その長軸（北東―南西）は南北と東約四。度北を歪している。一辺五十九米前後四方区基底面とし、約二十一度の傾斜では、二米上右（墳頂より七米、七。五米下方）で才一段上面を形成する。上段下辺に至る間は狭長な平坦面をなし約三米、三五米を測る。又遺出し上面は下段上面とほぼ同高（基底面より約二。一米北東では約三。五米を測る）

北東側造出しは基底面中十七四米、長さ西側共に八〇米の縦細の長方形を呈しているが後縁はさほど明確でない。南西側造出しに於ける中は二十一米と北東側よりかなり長く西側に相当の基異が認められる。西側一。六米と形状も整い、等高線も同間隔に走っている。しかし東側では一三五米と約三米長く、表土流出によるものか膏石が露出してゐる。又段の基底面に繞いてやや平坦面が認められる。この南端は付道拡張の爲一部削り取られコブシ六の河原石が散在してゐて、膏石の一部を思わせる。

州	全長		中 方 部				造 出 し	
			下 段		上 段		北東部	南西部
			上 辺	下 辺	下 辺	上 辺		
主 墳	長 さ	81.0	59.5	48.3	4.2	1.5	8.0	13.0
	高 さ	10.0	1.7~2.5		6.0~7.0		約 1.8	1.7~2.0

主 墳 規 模

一 二 段 は その 基 底 面 が 約 四 一 五 米 で 高 さ は 墳 頂 面 ま で 二 十 五 度 前 後 の 傾 斜 を な し、 六 五 米 を 測 る。 墳 頂 平 坦 面 は 面 辺 と も 十 四 米 で は ば 正 方 形 を 呈 す る。 この よう に 本 主 墳 は 一 辺 約 六 〇 米 四 方 の 基 底 を 有 し、 北 側 の や や 短 い 造 出 し と、 こ れ より や や 長 い 南 側 の そ れ と を 有 し 高 さ は 十 米 に 及 ぶ 二 段 式 双 方 中 方 墳 で あ る。 そ し て 本 墳 ・ 下 段 の 基 底 面 の 水 準 は 北 東 に 比 し 南 面 は 約 〇 五 米 低 く、 南 東 は 北 西 に 比 し 一 〇 米 一 一 米 前 後 低 い。 即 ち 別 量 で い え ば 北 西 附 近 の マ イ ナ ス 九 〇 米 の 基 底 線 を

示す等高線は北東区に近づくに従つて下段の略中位を走つてい。この事は南西区と南東区を比較する時と同様に言い得るの。であり、即ち基底線は北から南に至る傾斜よりも本壇或一帯の東方へ下降する自然地形と相似た高低を示しているのである。又この事は上段に於ても言い得るであらう。

かくの如き本壇はその形状を比較的顕著に残してはいるが墳頂北と南では径三〇米の掘込敷ヶ所にわたり認められ、又頂部東側半分は昔神社があったという加工の跡によるものか約〇五米の深さにわたり大きく削り取られ凹地を残している。墳丘東側斜面の南寄りでは階段状の跡が縦溝状の凹部をなし、且つて山田助蔵氏も石階が存したと記述している。従つてこの部分の等高線は着しく内弯している。

外部施設としては土師原岡筒埴輪が頂上斜面及び北壇麓外において発見されたなどのように認められていたかは明のかわない。又膏石も平坦面を除いてみとめられるが南面側造出し斜面にも現在多く見られ拳大から入頭大程に及ぶ河原石が使用され片麻岩及び肉縁岩と思われる。これ等の多数の石材がいづれか運ばれたかは未調査の爲、断定出来ぬが古墳規模から考慮すれば、その量は莫大なものであり地理的にも比較的距離な地城に求めねばならぬ。

又本壇基底線の周囲は全体的に凹地を呈し殊に本壇北側では〇五米内外の凹地が同濠状を形作つてゐる。即ち北東側造出しの西側附近、基底線に接する場所では墳頂マイナスイナ九五米を以し基底面より〇五米低く、又この反対側（造出し東側）一帯は

マイナス十五米と最深部を形成している。これの凹地は共に墳丘基底線と周囲の畑地に囲まれ、後者と約一米の高差を示す。等高線、八五米と九五米の走り具合を見れば、恰かも人工の施設を思わす感があり、古墳築造に際して土砂を削り取り、墳丘に盛上げた。古墳築造時の盛土に或る程度採土し、同時に周壕を形成つたかも知れぬ。しかしこの凹地の土量のみでは主墳全体の量に比すれば全く一部に過ぎぬ事は勿論である。猶本墳北東五六十米附近に長径六十米内外の池が残存している。猶本主墳の堆積土層を基底面上の略方形の四角錐と見なし、概算すると約一万四千八百立方米となる。

(2) 陪塚

① 一号墳

主墳の東南隅に築かれていたものらしい。本極めて甚だしく破壊されている。鈴木氏によれば、墳丘の規模は南北十一・七米高さ一・八米のものもある。青石、及び円筒埴輪片が認められている。

② 二号墳

本墳は俗称『小塚』と称される。ほぼ主墳基底線東約十一米を隔てて主墳長軸平行に位置するもので、基底部は二十二米内外の方形を呈し、主墳墳頂マイナス八五米に十二米四方の中央僅かに盛上つてはいる。本は平坦な墳頂を置く方形墳で高さは二米余を測る。本陪塚は比較的原始形を維持し、等高線も等間隔に走る。北東区に於て民有地開墾の爲一部分切断されている。この切断面には当時の墳丘築成の段階を示す土層(一)墳頂平坦面より下へ、黄褐色土層黒木コ、黄褐色

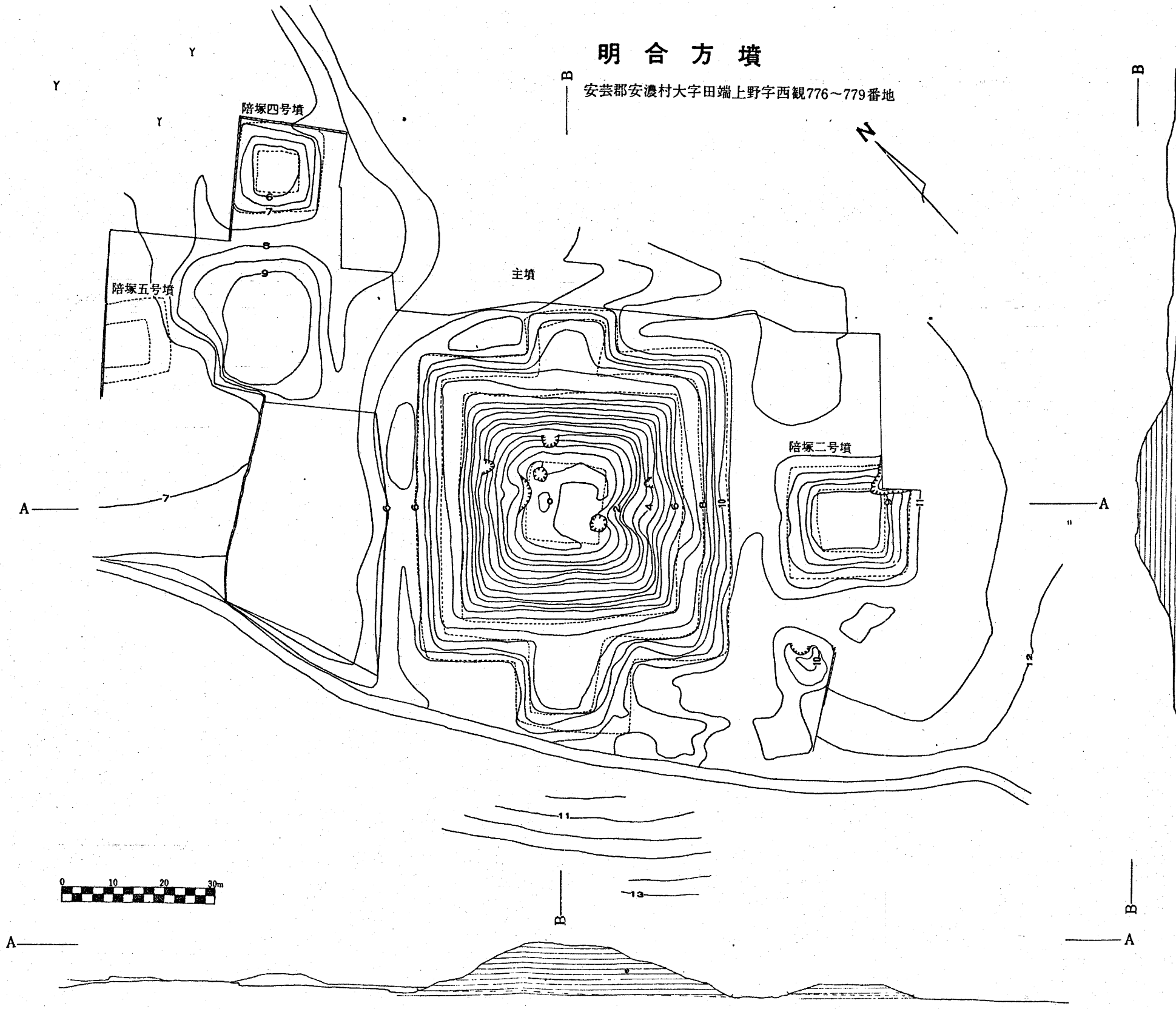
陪塚	m	全長		高さ	現状
		下辺	上辺		
1号 (陪塚才1号方墳)		(11.7)		(1.8)	(青石、円筒埴輪) 半壊 (青石) 埴輪片 墳丘北東麓削られ、封土堆積土層露出
2号 (才2号方墳)		8.0	12.0	1.8 ~ 2.0	
3号 (才3号方墳)				(1.0)	墳丘痕跡のみ (きぬみさ、盾片) 封丘西麓削られ、封土流出甚しい
4号 (土居外才1号方墳)		16.0	7.8	1.2 ~ 1.5	
5号 (才2号方墳)		15.1	8.1	0.7	封丘西麓削られ、封土土層みとめうる 周囲埴輪片散在

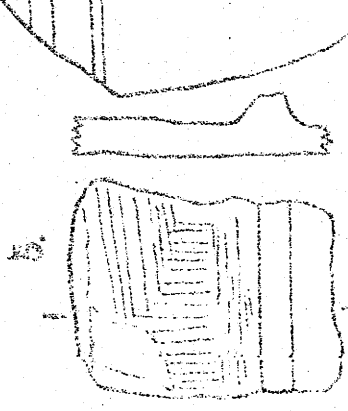
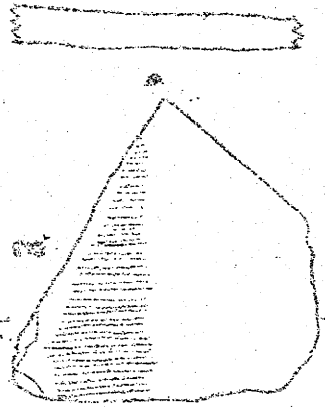
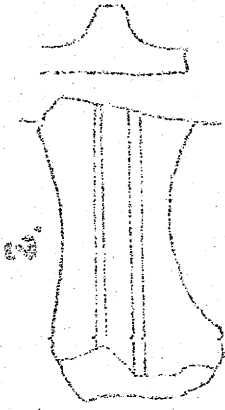
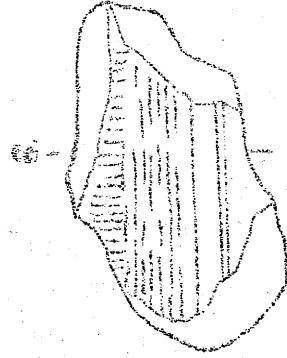
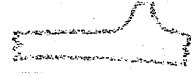
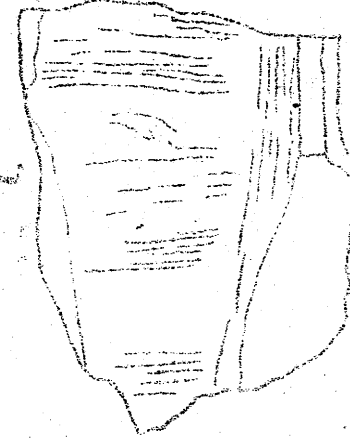
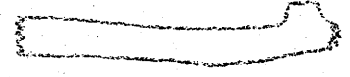
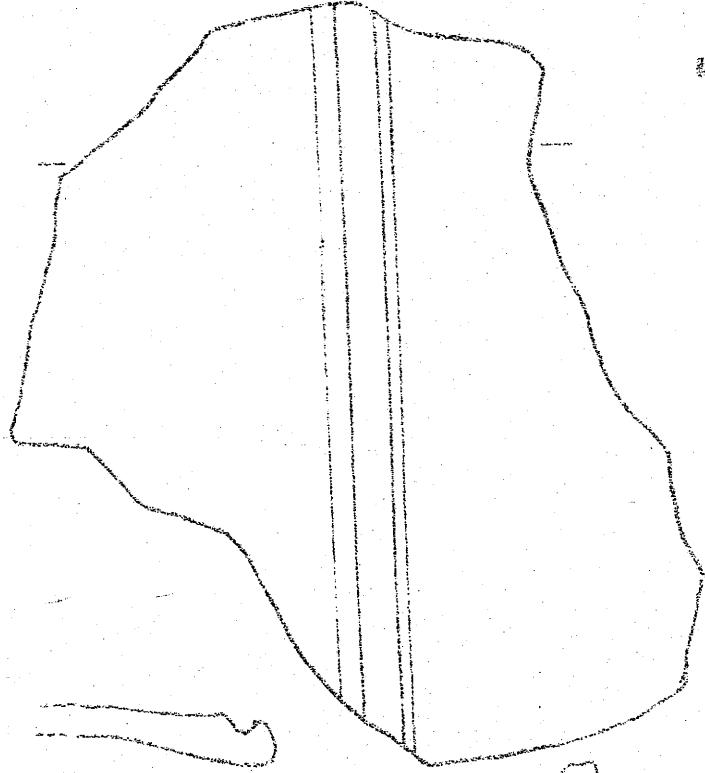
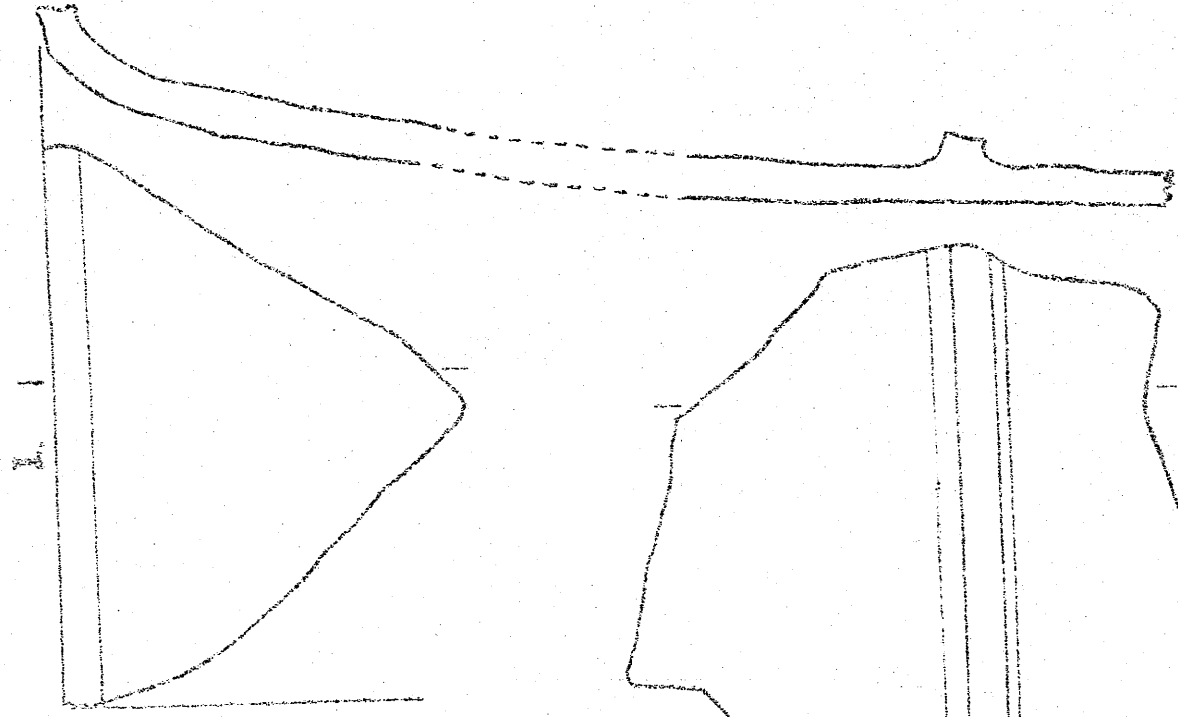
※ ( ) は鈴木氏報告 ( ) は山田氏報告

土層、黒木コ、暗褐色土層の順に水平行に堆積されているのが認められた。  
又遺物としては本陪塚の墳丘側面上部と中部に円筒埴輪がなびつべられていて、鈴木・山田氏は報告されているが今回の測量時には埴輪片が墳頂附近に突き立っているのが認められたのみである。そしてこの陪塚両側と主墳との間にはやや扁平な五米(一)米の不整形な高まりが見られる。即ち先に述べた才一号と後述する才三号附近である。南の小道を隔てて本陪塚才二号より約十二米の所で一米弱の高さを測り測量図でいふは等高線十米(一)十一米である。  
先の報告に於ては当時『方形ラナン半壊スル』と記述されているが現段階に於ても同様、南側では或る程

# 明合方墳

安芸郡安濃村大字田端上野字西観776~779番地





香信尺  
1:2

度基底部の境線を認め得るが、東側は畑地の為削り取られその基底境界線は判明するに至つていない。又北側に於ても土砂を削り取つた跡が深く見られた。この様な矣か今ここに方形墳なることは断定しかねるが、強いてその規模を述べるとは、一辺八米前後、高さ約一七米の扁平な方形墳である。

### ③ 三号墳

全壊して現存しない。故鈴木氏の調査の際に於ては、その痕跡が認められたに過ぎぬ。その規模はほぼ一号墳と同様のものらしい。

### ④ 四号墳

主墳の西方にやや高まつた広がりを見せる畑地に囲まれて二基の方形墳が認められる。即ち主墳北端の北方約三十三米を隔てて基底部南端を置く陪塚四号墳は主墳長軸とほぼ並列して位置し基底面東西十六米、南北十五米の略方形を呈し高さは約一五米を測る。しかし本墳は東側では墳丘もかなり整い基底線を明確にするものではない。西側は附壁の為一部削り取られ確定出来ぬ感を手えている。墳頂平坦面はやや西側が広がつているが七五米前後四方を呈し土砂の流出が著しく思れた。この墳頂平坦面と主墳との比高はマイナス五・八米で陪塚才二号のマイナス八・五と比すれば三七米高く、基底面に於ても後述する才五号と共に主墳才一級上面とほぼ同高でやや高い台地上に構築されている。本墳も俗称「小塚」と呼ばれ陪塚中才二号と共に形態を相当顯著に保持してはいるが西・北・東の三方は民有地に開墾され指定地域内いくつかはに柵を囲んでいる如く見われ、原型を明確にし得ない感さ

手えている。

### ⑤ 五号墳

陪塚才四号墳の西方二十四米には、七米程度の隆起した略平坦面が存在している。東西十二米、南北十五米となり西側が削り取られ雑草の為墳丘は認め難い感を与えている。しかし北側、南側斜面ではかなりの傾斜を呈し境界を想定せしめてゐる。この西側の畑地開墾の為削り取られた跡には約五米の長さで黒木コ土層上に黄褐色土層が積り重なつており、この事と本陪塚西側一帯の畑地により多数の廻輪円筒片、或は須恵片が散在している事よりすれば方形墳と決められ得るものである。

又この他才四号陪塚の北に、会つて一基の方形墳と考えられる痕跡が認められたと先の報告に記載されているが現在その附近は桑畑と化して全く想定し難い現状である。

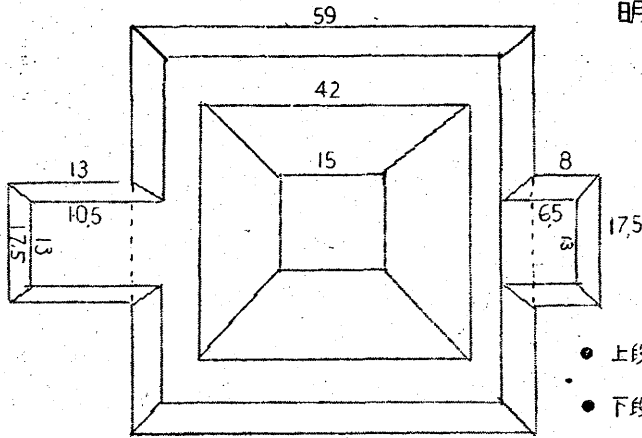
そしてこの才四、才五号陪塚と主墳北端の西方やや高い畑地に囲まれた地域に径二十一米、深さ一五以上の比較的大きな窪みが見られる。本地域は主墳頂より九米を下る。

本窪地は陪塚才四号の南ではさ程急傾斜を呈していないが、特にこの池状の窪み東側と西側（才七号陪塚の東）で急に深く現段階にあつてこれ自体が主墳、才四号、才五号陪塚、その他古墳築成時に於ける抹土によるものか、或は後世の土取りのものかは断定しかね、今後の調査をまたねばならぬ事を付加しておく。

## 四、遺物



算概土成築方合明



(単位 m)

$$\text{四角錐台体積} = \frac{h}{3} (A + \sqrt{AB} + B)$$

A-上底の面積  
B-下底の面積  
h-高さ

- 上段 =  $\frac{6.5}{3} (42^2 + \sqrt{42^2 \times 15^2} + 15^2) \div 8185.0$
- 下段 =  $\frac{2.9}{3} (59^2 + \sqrt{59^2 \times 48.5^2} + 48.5^2) \div 6087.0$
- 北東側造出し .....  $h = 1.8$  とする  
198.3
- 南西側造出し ..... 332.7

} 536.0

総 約 14808 m<sup>3</sup>

外部施設としての各種の植輪片が発見されているのみで、副葬品に因しては不明。植輪片には蓋、橋及び円筒植輪の断片が採集されている。この内測量時に発見した円筒植輪について述べる。(付図参照)

① 主墳は北西から北西方向へ七米程はなれた、主墳の周濠状のものの上りかけた所の、草生地地下五〇程の褐色土中より出土。外弯する口縁部の径約三十六六種、帯の外側では直径二十八四種であるが、破片の高さは不明である。器壁はほぼ灰黒色であるが表裏面では茶褐色で、壁の厚みは約一程である。白色半透明及び不透明の四耗内の砂粒を多く含んでいる。表裏共に成形の際の凹凸もさほど目立たない。裏面には一耗中の横に平行な刷毛目が認められる。

② 以下記述するものと同様明合近辺で発見されたもので十二種大の円形透しを有し、厚み一程弱である。色調は器壁全面赤褐色であり、表裏共に耗筒内に横に平行な刷毛目を有する。又二耗大の白色砂粒が若干みとめられる。

③ ④は共に茶褐色を呈す。縦に一五耗筒内に平行な刷毛目を有し、兩者共に厚み一程弱で砂粒を若干含んでいる。

⑤ 茶褐色を呈し、やや硬質の一種弱のもので八耗中の帯を有し下側がやや急にけり込んでいる。器表はほぼ直角に平行な二耗筒内の刷毛目をかなり明確に示しており、表裏共にさほど凹凸は見られず硬質のものである。

⑥ ⑦共に茶褐色でやや硬く⑥は厚さ七耗内外と不破片中最も薄い本刷毛目は明確に認められ、縦横に存する。帯の中程は

微かに凹状をなしている。⑦は下側水がく帯の一部しか見られ  
ない、帯は前述のものより六耗程の凸と少々低い。帯表は  
微かに流線状の刷毛目を認め、厚み一種弱である。⑧の共に帯  
の下側が上側に比し急に入り込んでいいる。  
猶内部構造に關しては既に消滅したものに於いても現四基  
のもの同様不明である。

五、おわり に

安濃川流域一帯に見られる弥生時代からの数多くの遺跡分布  
はその数に於て特に古墳時代後半にその大部分を占めている事  
は既に述べた。これらの中にあつて本明合古墳はその最大な規  
模の墳丘と共に三基の階梯を有し、番石、埴輪を繞らし、或は  
本古墳の立地条件等を考慮する時本安濃川流域一帯の数少い前  
半期古墳の典型をなしている。即ち本流域一帯前半期古墳、そ  
の数は教基を確認するのみであり、その規模は比較するに至ら  
ず、坂群の本明合古墳被葬者がこの流域一帯を支配し政治的、  
社会的、更には宗教的地位身分關係にあつても、権力者であつ  
たと言つても過言でなからう。又本古墳以後安濃川流域一帯に  
現れる後半期古墳はこれと相反して水田に沿つてのびる低丘陵  
に多数構築されている事は或る意味におき、一河川流域の農業  
生産の発展と共に地畝的、政治的集團の大きな変化の流れを考  
慮する上にも重要な意味を持つものである。

これまでの調査によれば伊勢に於ける方形墳(前方後方を含  
む)は表の如く幾つかは判明している、この内確實な所一志郡  
の三基の前方後方墳を除いてはいづれも小規模な方墳である。③

県内における方形墳地名表

古墳名	所在地	立地	墳形	径	高さ	現 状
麻橋塚1号	翼弁郡北勢町麻生田	台地端	前方後方墳	46m	前方部 1m 後部 3	前方後方墳小
広A-1号	四日市市東大鐘町広	台地南端	方 墳	16	4.5	ほぼ完存
広A-2号	〃	台地東縁	〃	12	2.3	〃
広B-1号	〃	台地上	〃	31	3.4	〃
広B-3号	〃	〃	〃	16.7	1.3	〃
保子里5号	鈴鹿市北一色町保子里	台 地	〃	15	2.3	ほぼ完存、頂部小
筒野1号	一志郡埴野町	台地上部	前方後方墳	39.5	前方部 10 後部 3.7	ほぼ完存、主体部段極
向山	〃	丘陵頂部	前方後方墳	約720	前方部 25 後部 5.5	〃
西山	〃	独立丘陵上	前方後方墳	436	前方部 25 後部 4.0	頂部及び墳基に破壊甚

この場合  
一志郡に於  
ては筒野、  
向山、西古墳  
共前方後方  
墳であるこ  
とは隣接地  
域としての  
安濃川流域  
に伊勢に於  
ける最大規  
模の明合方  
墳が築造さ  
れた事と極  
めて密接な  
歴史的な  
ありを暗示  
しているか  
も知れぬ。  
同時に本明  
合古墳とは  
ほぼ同時期  
の古墳、即ち  
伊勢海沿岸  
北勢の低へ

四日市市)、中勢鈴鹿川、雲出川をはじめ兩勢松阪市所在の泉内最大の規模を有す宝塚一号墳と共に四世紀から五世紀の前半期古墳に目を転ずる時、より一層伊勢湾沿岸に於ける古墳時代成立、展開の過程を明確にし同時に畿内大和政権とここ『伊勢』に於ける地方との政治的関係もさうに確かなものとされるであらう。

本古墳の測量は、一昨年四月三、四、五日にわたリ、青木晴子、大面素行、柴田勝洋、園里隆寛、竹内正弘、土屋正男、中村淑子、萩野美恵子、宮崎光雄、村上喜雄、山沢義貴が、昨年十二月村上喜雄、大西素行、茂生悦生、飯田かよ子、長谷川彦男、金村充人、和田年弥が行った。

尚本古墳測量に關して御教示下さつた故鈴木敏雄氏、『明合古墳報告書』の執筆者山田勲蔵氏、並びに測量中何かと御世話下さつた安濃村教育委員会をはじめ、地元の方々に對し、ここに感謝の意を表する次第である。

註

(茂生)

① 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財包蔵地一覧表』一九六四年

② 三重県教育委員会『三重県文化財要覧』一九五五年

③ 方墳の「在り方の地域的特色」として西川宏氏は、畿内周辺(伊賀、伊勢、但馬、播磨など)に於ては「首長層の一部が一時的に採用したにすぎず、ついに伝統とはしなかつた」と把握している。(同氏『方墳の性格と諸問題』)

『私たちの考古学』19、一九五九年所収)

△付記▽ 三重県主要古墳基本調査(測量済み)

- 1、筒野前方後方墳「ふびと」20号
- 2、明合方墳「ふびと」23号
- 3、西山前方後方墳「ふびと」20号
- 4、鎌切前方後円墳「ふびと」22号
- 5、高倉山巨石墳(一九六四年十一月)
- 6、向山前方後方墳(一九六五年一月)